

ミニ

特集

## イネカメムシの発生と防除の現状

## 茨城県におけるイネカメムシの発生状況と防除対策

茨城県農業総合センター 農業研究所 さい じょう けい すけ 西 條 圭 祐\*

## はじめに

茨城県におけるイネカメムシ研究の歴史は古く、1950年代ごろに県内で多くの基礎的研究を行った大内実氏は本誌にも寄稿しており（大内，1953），その内容は現在でも参考となる重要な知見である。県内における本種の発生は1953年以降急激に減少し（高井ら，1976），斑点米カメムシ類の優占種はクモヘリカメムシへと変わり，県内でイネカメムシの研究はしばらく行われていなかった。しかし2000年ごろから県内の一部地域で発生が再確認されて，2010年以降発生が増加・拡大傾向となったことから（大田ら，2020），本県においても本種の発生動態や防除方法に関する研究に再び取り組むようになった。特に最近の発生拡大は顕著であり，2024年と25年には，茨城県病害虫防除所が本種を中心とした斑点米カメムシ類の注意報を2か年連続で発表するなど，イネカメムシをはじめとした斑点米カメムシ類は，今日の水稲栽培を考えるうえで，対策が欠かせない害虫となっている。

本稿では，本県における近年の発生状況を中心に，品種別の発生動態や防除方法について紹介する。

## I 茨城県におけるイネカメムシの発生推移

大田ら（2020）は，茨城県内の2001年から18年のすくい取り調査において，2018年の成幼虫数が最も多かったと報告している。しかし，茨城県病害虫防除所が毎年8月上旬に水田内で行っているすくい取り調査の近年のデータからは，2018年以降さらに増加しており，その後も多い傾向が続いていることがうかがえる（図-1）。

また，発生地点の拡大状況を示すために，2001年から25年を5年ごとの調査期間に区分し，各地点について2001年以降初めてイネカメムシの発生が認められた

調査期間を地図上に示した（図-2）。2001年から10年は県南地域を中心に発生を確認していたが，2011年から20年の間に県央・県西地域においても発生を確認し，2021年以降は県北地域でも発生拡大を認めた。2025年現在，県病害虫防除所が調査する59地点のうち，2001年以降発生を認めていないのは3地点のみであり，茨城県全域で本種の発生を認めている。また，近年新たに発生を確認した地域において，密度が高まっている可能性がある。実際，県北地域の常陸太田市において，2024

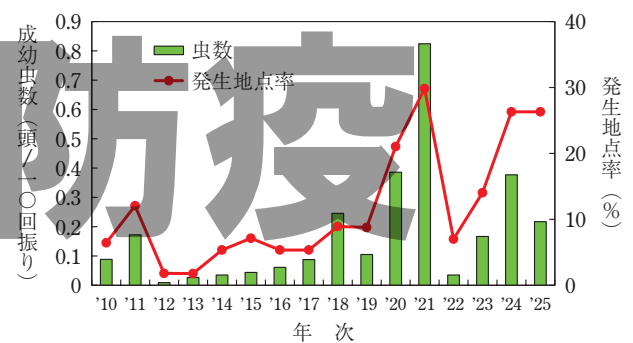


図-1 茨城県における近年のイネカメムシの発生状況の推移  
注) 茨城県病害虫防除所が県内全域57地点でおこなっている8月上旬水田内でのすくい取り調査より。

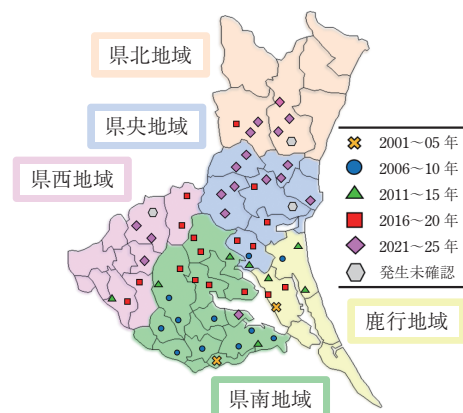


図-2 茨城県における近年のイネカメムシの発生確認地点の推移  
注) 県防除所の7月上旬～8月下旬までのすくい取り調査で，2001年以降に初めて確認された地点を示す。本図は発生地点の広まりを示すものであり，すべての地点で継続して発生しているとは限らない。

Occurrence and Control of Rice Stink Bug, *Niphe elongata* (Dallas) in Ibaraki Prefecture. By Keisuke SAJO

(キーワード：イネ，イネカメムシ，斑点米カメムシ類，防除対策)

\*現所属：茨城県県南農林事務所